

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

一般の部

令和五年十月度 入賞句一覧 投句数 六百十九句

特選



奥の細道
むすびの地

度会 さち子 選

美しき声の鳥来て汀女の忌

東京都新宿区 花澤 ちいこ

秋は空気が澄んでいるせいかな、鳥の声も清らかだ。イカル、キビタキ、コマドリの美しい声は、朝、台所仕事を終えての一時を楽しませる。中村汀女忌は九月二十日。星野立子、橋本多佳子、三橋鷹女らとともに4Tと呼ばれた。ホトトギスの代表的俳人。台所俳句と揶揄されるも、台所は女性の生活の場と抒情的に詠んだ。老いても白髪的美しい女人であった。

朝刊を取り出す秋が手に触れて

東京都世田谷区 関戸 信治

朝刊を取り出す秋が手に触れて。いつもと変わらぬ朝の行動なのだが、空気に風に、遠くに見える伊吹山の色にも、ふと秋を感じる。手に取った新聞のインク、紙の匂い、手触りにも秋が来ておどろかぬ。五感にかすかに感じる秋。古今集の歌「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」を思い出させる。「秋が手に触れて」は実に巧み。繊細な句である。

秋灯にブックカバーの深き皺

本巢郡北方町 谷 弘行

読書の秋。虫の声をきき、一杯のコーヒーを片手にしながらの夜の読書タイムは、本好きにとってには至福の時。ときにこれまで自分の人生を振り返り先の夜を訝しみ、未来を見る。また小説のなかの人物とともに喜び嘆き、悲しみ怒る。読み切れずに持ち歩いていたりうちにできず。てしまった皺か。いや読み返すことによる皺、思案の皺か。スタンドの灯がその皺の影を照らす。

秀逸

秋光や祭司の顎の尖りたる

岐阜市 関谷 恭子

再検査の青き天井秋の雨

養老郡養老町 大橋 与志

草紅葉舟蹴つて乗る川漁師

大垣市 村田 通夫

草の葉に転がる光秋の水

大垣市 松岡 みつ

すいつちよん一瞬青き筋残し

各務原市 野村 かおり

座布団に温もり残し生身魂

三重県四日市市 井戸 康子

濡縁に雨月の雨の跳ねる音

揖斐郡大野町 横山 道男

切通し行く影ひとつ月天心

神奈川県川崎市 立野 音思

星月夜村一軒のカラオケ屋

埼玉県東松山市 谷本 だつく

跳ねたるは紅葉の雫露天の湯

神奈川県横浜市 龍野 ひろし

入選

静かなるひとり住ひや桐一葉

埼玉県日高市

渡辺 義子

老いてなほ美しき母の背女郎花

岐阜市

田中 淳子

輪中晴風のつながる稲田かな

岐阜市

廣瀬 あや子

動くものなき炎天の交差点

不破郡垂井町

竹嶋 富美子

天高し喉立てて啼く牧の牛

東京都世田谷区

関戸 信治

小鳥来る棚に富山の置き藁

東京都新宿区

花澤 ちいこ

くれなるの褪せる早さよ曼珠沙華

大垣市

小林 研

数独を解く虫の音の高くなり

大垣市

香田 末代

祖父の下駄素足でちよつと音鳴らす

大垣市

米山 春江

藁屋根は朽ちるに任せ鳥ふ

各務原市

野村 かおり

車椅子囲み鎮守の銀杏舞ふ

不破郡垂井町

西田 厚堂

思案してやうやう一歩いぼむしり

兵庫県神戸市

岸下 庄二

天高しがぶりとフランクフルトかな

三重県鈴鹿市

松井 政典

虫に寝て鐘に目覚める宿坊よ

大垣市

森 茂寿

完結編読み終へ後は虫しぐれ

三重県三重郡

水野 悦子

天高し海一望の文学館

兵庫県高砂市

川西 智子

立上がるゴジラ歩かむ夏の雲

大垣市

田口 貞善

猫の尾の影くつきりと良夜かな

大垣市

三葉 すみ子

水音に音符をつけて芋水車

愛媛県松山市

平野 ヒサエ

ビー・アンビシヤス青空に挿す鷹の爪

埼玉県さいたま市澤田

紫

一般の部

選者吟

土砂降りの後の夕日や秋燕

さち子

